

トーマス・マンとヘルマン・ヘッセの ゆかりの地を訪ねて V

田 中 博

1) は じ め に

「……戦争中私がロマン・ロランに一人の仲間を持っていたように、この仲間を1933年以来はあなたに持っていたのです。私は決してあなたを失うつもりはありません……。」 (1)

1936年2月5日付のヘッセが、マンにあてた手紙の一節である。仲間〈Kollege〉とヘッセが、マンを呼べるようになったのは、やっぱり1933年までまたねばならなかったのかと、再確認できた思いである。〈Während des Weltkriegs〉戦争中とは、第一次世界大戦中のことで、その経緯は前回少し報告した通りである。今回は、トーマス・マンが第一次大戦から、ドイツ共和国〈ワイマール共和国〉時代へと時代の流れにそってどう変化していったのかを彼の作品を追いながら、みていきたいと思う。

2) 第一次世界大戦中のマンについて

まず『夫トーマス・マンの思い出』 (2) からカーチャ・マンの証言から引用してみたい。

……兄弟は、それまでにも何度も論争しあっていました。なにしろ、ハインリヒは根からの西欧びいきであったのにたいし、わたしの夫は、戦争勃発までは絶対に愛国主義ではなかったものの、戦争によって自分のそれまでの立場を変えてしまい、一時期などは、諸外国はドイツを憎悪するあまり、ドイツを包囲して打倒殲滅しようと謀っているとふれまわるさまざまな作り話を信じこんでいたほどでしたから。しかし、それにしても、ハインリヒの『ゾラ論』さえ出なかったなら、かれは『非政治的人間の考察』を決して書かなかったでしょう。すべては、兄にたいする激情的な論争でした。事実、多かれ、少なかれハインリヒの代名詞と考えてかまわない〈文明の文学者〉という理念が、この本のかなりの部分を支配してはなりません。もちろん、トーマス・マンは、この本を書きすすめるなかで、自分を支配しているさまざまな理念から、しだいに身をもぎはなしていきました。最後に書かれた〈序文〉においては、かれは、すでに距離をとっていますし、自分の撤退作戦を云々し、この後にくるもの、こざるをえないものはデモクラシーである、と確信をもって云っています。かれは、心血をそそいで『考察』を書きましたが、そうすることによって究極的には、かれがそのなかで擁護したものを乗り越えたのです……。

もう一人、息子のクラウド・マンの証言を『マン家の人々』転回点Ⅰの中から書き出しておこう。

……あの苦難の数年間にできあがった独自の著作「非政治的人間の考察」を私をはじめで読んだのは、戦争もとうにすんだ後のことだった。……戦争で打ちくだかれた詩人によるこの長い、悩みにみちた独語は、きわめて独特な、いや比類のないドキュメントだ。文学的に評すれば、それは一つの傑作、輝かしい力業だが、政治的に見れば、破局といわねばならぬ。……政治によせる新しい関心は、逆説的に、まず政治に対する激越な抗議として現われた。ゲーテ、ショーペンハウアー、ニーチェの弟子は、ゲルマン文化の悲劇的偉大さを西欧文明の戦闘的で人道主義的な態度に対して守ることを、自己の最も高貴な業務と考えた。彼は、プロイセン帝国主義の野蛮な驕慢さを、デューラーやパッサヘをへてロマン主義者さらにツァラトゥストラにいたるドイツ精神の純粋な啓示ととりちがえている…… (3)

そして、トーマス・マン自身のリヒアルト・デーメル宛ての手紙が、一番開戦時の気持ちを伝えているように見える。

……あなたが出征されると聞いた時、私はほんとうに自分が恥ずかしくなりました。そして「ルントschau」誌に載った私のささやかなエッセイ〈戦時随想〉は、結局のところ羞恥心から出たものであり、せめて自分の頭脳を一度は直接祖国ドイツのために役立てたいという欲求から出たものです。私は、この自分のエッセイが何らかの意味で重要なものだと自惚れてはいませんでした。事態の進展を前にしてドイツのインテリは「無力」だったと考える人々がいますが、私はそういう人間ではありません。私は、むしろ反対に、事態を解明し、讚美し、深化することはある意味で非常に重要な仕事だと考えており、ジャーナリズムにおける自分のささやかな活動に比べればかなり貧弱なものではないかと危ぶんでおりました。…… (4)

愛国主義的な「戦時随想」等を、S. フィッシャーの考えでまとめて、1915年6月に時代叢書の一冊として『フリードリッヒと大同盟』の表題で出版された。すでにマン自身の中では、次にあげる、パウル・アマン宛の手紙の中で示すように、変革が進んでいて、『魔の山』の執筆にもどりたいと考えていたのだが、この出版が国内外で多数の反響を呼ぶことになった。

1915年3月25日付のマンの手紙によると……これはもはや疑うことの出来ない事実ですが、プロイセン主義の精神は、すでにドイツにおけるその歴史的使命を終え、今日では、克服されるべきものになっています。……私が望むものは、政治的プロイセン主義の克服なり、戦後到来するに違いないドイツの民主化なりが、ドイツを浅薄化することのないままその陰惨さを取除いてくれることであり、現実にたいするドイツの関係がこれまでより親密かつ明朗なものになり、民主的な世界文化への途上においてドイツが指導的な役割を演ずることです。…… (5)

マン夫人のカーチャ・マンが、すでに前記したように、この時期に、1914年11月前に「エーミ

ル・ゾラ論」を兄のハインリヒ・マンが論文を書き、マンが目にしたのは、1915年の冬と思われるが、「文明の文士」ハインリヒとの意見、見解の差異と、国外からの、ロマン・ロランの『戦いを越えて』の八章偶像の中で、「マンは、傲慢と激しい狂言の錯乱し発作のなかで、かってドイツに対し加えられた最悪の非難でドイツを飾ろうと躍起になっている。」それこそ激しい非難が、マンに投げかけられた。『魔の山』などの作品に取り組むことも出来ずに、三年近い年月を、精神的格闘のドキュメントである——『非政治的人間の考察』という論文の始まりの大きなきっかけであった。まさに、ロマン・ロランやハインリヒ・マンとの論争は、ヨーロッパ的なものとドイツ的なもの、文明と文化、文明の文化的なものドイツ詩人的なもの、19世紀と20世紀的なもの、政治と非政治の対立として、おこなわれているが、もう一方で、実は、トーマス・マン自身のときがたいアンビバレットとして、自己検さくとしておこなわれてきたと思われる。『考察』は1918年3月にS. フィシャーのもとに原稿が送られた。ところが、ドイツの政治状況は、あわただしい変化をみせはじめる。18年10月初めに、自由主義者、バーデン公マックスによる内閣が成立、敗戦（休戦）処理に入る。11月10日ウィルヘルムII世皇帝の退位、オランダへの逃亡。翌11日に連合国側と休戦条約に調印し、第一次世界大戦は終結した。近年になって公刊されたマンの日記（1891年～1921年）によると、上記のような政治的変革の中で、『考察』を公けにするのをためらった様子が「10月6日、夫人のカーチャと相談の結果、フィシャーに本の差し止めを電報で相談するが10月7日にはフィシャーからすでに発行されたとの電報を受ける」との記述がなされている。

3) ドイツ共和国について

次に『ドイツ共和国について』〈Von Deutscher Republik〉は、ゲールハルト・ハウプトマンの六十才誕生記念にあたり、1922年10月15日ベルリンの音楽学校ベートヴェン・ホールで行われたものであって、第一次世界大戦開始直後の愛国的トーマス・マンからすれば、この講演内容は後半生の政治的姿勢——デモクラシー——への変革を示したものとなった。

……私はさらに進んで次の質問を投げかけたい、すなわち、私たちはすべて古い国家権力が、ドイツ的美の現実の努力に対置したもろもろの抵抗を、過小に評価してはいなかったか、今、名をあげられた人々が予言した新しい人間性、デモクラシーに肩をすくめる諸君の憧憬溢れる誇りかな心にひそむ新しい人間性、これが活気を帯びる有利な可能性を見出すのは、古い国家の基盤よりはデモクラシーの地盤、共和国の地盤の上においてではないだろうか。と…… (6)

マン自身がその講演の中で「……18年の反政治的、反民主主義的考察は?! 背教の変節者め! ……」と批判をするだろうと述べているが、事実この講演録の中でも、不満の意味で、足をならす若者の様子も書き込まれている。「私はデモクラシーが嫌いだ。同時に政治が嫌いだ。けだしそれは同じものだからです。」(パウル・アーマンあての手紙、1916年11月25日)のように政治とデ

モクラシーの同一視、政治＝デモクラシ世界に対し、ドイツ精神は自己固有のものとして「文化」という非政治的・貴族主義的概念を対抗させてきた。「非政治的人間の考察」であったトーマス・マンからすれば、この演説は、変身ではないのか、転向ではないのかという世論は、マン自身が「考察」は「今も認識は変わらない」と主張しても、そうとれない面があるというよりは、「考察」によって、又、歴史的政治的状况、特にミュンヘンに於ける政治的状况、1920年3月のカップ一揆、1921年4月ナチス党結成、1922年6月外相ラーテナウ右翼青年による暗殺事件は、マンによる現実政治への認識を大きく変革し、成長発展させたのであろうと思われる。それ故にこそ、この講演ではこうも云っているのです。……はっきり申し上げますが、私の意図は、必要な限り諸君を共和国の側に獲得することであり、民主主義と呼ばれているものの側に獲得することです。…… (7)

「ドイツ共和国について」の講演に至るまでもう一つ解決されていなければならない、ハインリッヒ・マンとの兄弟喧嘩についてもふれておかなければならない。「非政治的人間の考察」をトーマス・マンに書かせた理由の一つに〈文明の文士〉ハインリッヒの書いた『ゾラ論』があったことをすでに述べておきましたが、——トーマス・マン夫人のカーチャによれば『考察』を書かせた最大の理由と云われている。——そのハインリッヒとの兄弟喧嘩の収拾と仲直りは、1922年1月にハインリッヒがとても重い病気にかかったときにおこなわれた。

……兄はここ数年のうちに、昔に比べると、気が弱くなり、優しくなったと言います。兄の物の考え方にぜんぜん変化がなかったということはありません。ひょっとすると、ある種の意味で二人がお互いに相手の方へ近づいていくということもあるかも知れません。現在の私を本当に支配している考えが、人文性思想の新しい個人的完成という考え——もちろんこれは、ルソー的な意味での人道主義社会とは違いますが——であることに思い至ると、私にはどうやらそんな気がしてくるのです。…… (8)

その当時、最も親しい仲間、エルンスト・ベルトラムへ、1922年2月2日付の手紙の中で、ハインリッヒに、ミュンヘンの自宅で、ハインリッヒを含む親しい人々の前で、この講演原稿を読みあげているという記録が残っている。

4) ヘッセについて

この文の書き出しのところで、ヘッセがマンあてに書いた手紙の中で、1933年以後はマンを、私の〈仲間〉Kollege と呼ぶに至るまでに、1904年4月にフィッシャー社社長、S. フィッシャーによってミュンヘンでトーマス・マンに彼が引き会わされた日から、1925年の11月から12月上旬にかけて南ドイツを旅した際に、ミュンヘンのトーマス・マン宅を訪れた、直接的な出会いの二度目と思われる時点までを、今回は調べておこうと思う。第一次世界大戦以後から1925年の『ニュ

ルンベルク紀行』に至るまでの、ヘッセをたどる前に、前回の拙著の訂正をしておきたい。それは1914年11月3日付の「新チューリッヒ新聞」にのせた〈O Freude, Nicht diese Töne!〉によって、ドイツからはげしい反発や抗議をまねいたと書いたが、厳密に云うと、1915年10月10日付けの「新チューリッヒ新聞」にのった、「再びドイツで」の方であったのである。〈Wieder in Deutschland〉を少し紹介すると、そのエッセーは、次のように結ばれている。

……Ich habe nirgends HaB und laute Erbitterung gefunden, das Publickum der HaBgesänge ist sehr klein geworden. Ich habe Hoffnung, das spätere Neuanknüpfen der Beziehungen zwischen den Völkern werde trotz allen Schwierigkeiten doch etwas leichter und etwas rascher gelingen, als unsere Sorge eine Zeitlang glaubte.…… (9)

戦時下のドイツが落ち着いていて、憎しみの歌声も小さくなって、心配していた諸国民の間の関係も修復が速められそうだという、ヘッセの平和な楽観が書かれており、反戦の言辞はむしろ無いが、その楽観の姿勢が逆に、「ケルン日刊紙」等で、兵役忌避者ヘッセは古里、ドイツを裏切っていると非難した。こちらの方が、事実に近いようだ。

それでは引き続き、ヘルマン・ヘッセの1916年からニュルンベルク紀行のあった1925年まで、彼の簡単な年譜をふり返っておきたい。1916年3月に父親の死。三男マルチンの重病、妻マリアの精神病の徴候があらわれる。彼自身も、ラング博士のもとでの精神分析による治療を受ける等、個人的不幸の年であった。1915年からはじめられた「ドイツ捕虜のための図書センター」の仕事は1919年まで続いた。1919年に出版された注目の小説『デーミアン』は1917年にわずか数ヶ月でベルンの家で書かれたものである。1918年11月第一次大戦が終り、翌19年5月に、スイス、テッシン州のルガーノの近くのモンタニョーラに妻や子供を置いて、一人移り住んだ。1920年『クリングゾルの最後の夏』1922年『シッタールタ』刊行。1923年妻マリアと正式に離婚。スイス国籍をとる。チューリッヒ郊外のバーデンで座骨神経痛とリューマチの治療の為滞在する。1924年1月ルート・ヴェンガーと結婚。1925年『湯治客』刊行。南ドイツを旅行。ミュンヘンで、トーマス・マンを訪問する。

5) ヘッセとマンの接点をもとめて

この時期に於けるヘッセとマンとの間の、接点を私が収集した資料からなるべくいねいに拾い出そうと試みましたが、苦勞した割りには成果は少ないが、それを次に書いておく。まず前引用した、1916年8月2日及び8月10日付のマンからヘッセにあてた葉書が残っている。ヘッセが「ドイツ捕虜のための図書センター」の活動の為に、協力を呼びかけたことに対する返書である。トーマス・マンの意志で、彼の日記は二度にわたって、焼却されて、1933年から1951年までの日記が死後20年は開封を禁ずるという説明つきで残されたものの中に、1918年—1921年の日記がまぎれこんで残っていた。個人的記録として貴重なものなのだが、ヘッセに関するものは、た

だの二個所で、次のような記述である。

……Sonabend den 21. VI.(Nachm.)

……Fischer schickte unseren Vertrag zur Erneuerung, schrieb über Sinclair, der mysteriös ist (der Verlag bekam das Mt. durch Hesse aus der Schweiz), und bat, meinen Brief über ihn im Buchhändler-Börsenblatt mitteilen zu dürfen.……

Dienstag den 21. X.

……Bin zu frieden, daB die Verleger mein Lob Sinclairs und Pontens benutzen.……

(10)

トーマス・マンがシンクレアの書いた『デーミアン』に興味をもち、その作者についてフィッシャーに問い合わせたことに関する短い記述である。もち論、このシンクレアは後に、ヘッセ自身の作品であったことが判明し、ヘッセ作として途中の9版から出版された。〈Emil Sinclair; Demian. Die Geschichte einer Jugend〉から〈Demian. Die Geschichte von Emil Sinclairs Jugend〉と改題されたものである。次にトーマス・マンの妻であるカーチャ・マンによる〈Katia Mann, Meine ungeschriebenen Memoiren. S. Fischer Verlag, Frankfurt am Main 1974〉の邦訳『夫トーマス・マンの思い出』から次の文を引用しておこう。

……しかし、いずれにしましても、かれがいちばん好きだったのはヘッセだったと、わたしは信じています。トーマス・マンは、『デーミアン』をいちやく細心な関心をもって読みましたが、〈シンクレア〉というのがヘルマン・ヘッセの仮名であることは、もちろん知るよしもありませんでした。かれは、この未知のシンクレアなる人物について友人仲間にあずねてまわり、S.フィッシャーにも問いあわせましたが、原稿を仲介したのはヘッセで、シンクレアはスイスの若い病弱な詩人で、騒ぎたてられることを望んでいない。という返事しかもらえませんでした。かれは、自分はただシンクレアに、『デーミアン』が非常に気に入ったということだけを伝えただけなのに、と言って残念がりました。

ヘッセとは、20年代の始めごろにミュンヘンで知り合いになりました。かれは、後にかれの妻となったニノン・ドルビンを伴って、わたしたちを訪ねてきました。わたしたちは、とても仲の良い友達でした。わたしの夫は、かれの人柄にとりわけ好感をもっていました。…… (11)

このカーチャの語った二つの内容に注目しておきたい。一つは『デーミアン』のエピソードはトーマス・マンの日記にある事実である。もう一つのヘッセと知り合ったのは20年代の始めごろミュンヘンであり、ニノン・ドルビンを伴って訪ねてきたということである。後のことは事実はどうだったのか。1925年の『ニュルンベルク紀行』でマンを訪ねた記録の以前にその事実があっ

たのかどうかを知りたかった。残念なことに彼女の本の記述以外に20年代の始めにヘッセとの出会いが私はみつけれないので、ニノン・ドルビンを伴ってという記述を少し調べてみた。ヘッセは三人の女性と結婚している。最初の妻マリア・ベルヌウリとは1923年6月に離婚し、1924年1月ルート・ヴェンガーと結婚、1931年11月ニノン・アウスレンダーと結婚した。ニノン・ドルビンとのヘッセの関係は、プライベートな面なので余り囲りにも知られていないのか、後に書かれたものの中でも年代にいきちがいが多く判然としない。第一次大戦以来、ヘッセにとって、外国人の友として最も親しく、文通が多かったロマン・ロランの手紙の一節をあげておこう。もっとも事実に近いのではないかと私自身思うからである。

……マドレーヌ・ロラン宛 1931年8月27日 パーク・ホテル・ルガーノ

……このニノンとは何者だろうか？私は彼女の名を知ることができませんでした。でも、驚いたことに、すでに十年前から——だから、ヘッセの二度目の結婚以前から——モンタニョーラの、ヘッセと同じ建物（村のなかの、いまのとべつな家）に彼女はいたのだということを知りました。…… (12)

次にギゼラ・クライネ著の〈Ninon und Hermann Hesse〉の Zeittafel 年表から抜粋しておこう。

- ……1922 in Sommer findet die erste persönliche Begegnung von Ninon Dolbin und Hermann Hesse in Montagnola statt.
- 1926 an 21. März besucht Ninon H. Hesse auf der Rückreise von Genf nach Wien in Zürich
- 1927 im April bezieht Ninon eine möblierte Wohnung in der Casa Camuzzi bei Montagnola
- 1928 im März fährt Ninon mit Hesse in seine schwäbische Heimat und wird seiner Familie als seine »Sekretärin« vorgestellt.
- 1931 am 14. November findet die standesamtliche Trauung von Ninon und Hermann Hesse statt, danach Ninons »Hochzeitsreise« nach Rom und Hesses Rheumakur in Baden.…… (13)

以上二点の資料から見て、カーチャ・マンの20年代の始めにミュンヘンにニノンとヘッセが、マン家を訪ねてきたという記述が事実なのか、ひょっとすると記憶ちがいではないのかという私の疑問に答えを与えてくれることにはならなかった。次に西ドイツのマールバッハにあるシラー国立博物館とドイツ文学文書館の館長の要職にあったベルンハルト・ツエラー教授の編集による〈HERMANN HESSE in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten〉からトーマス・マンとの関

わりを書いた個所を引用しておく。

……Auch Thomas Mann, den Hesse vor dem ersten Weltkrieg in einem Münchner Hotel bei einer Einladung des gemeinsamen Verlegers Samuel Fischer kennengelernt, dessen <Königliche Hoheit> er 1910 im <März> besprochen, den er dann, wie in der Nürnberger Reise erzählt wird, einmal in München besucht hatte und mit dem er der Chantarella bei St. Moritz beim winterlichen Skiurlaub wieder zusammengetroffen war, stellte sich in jenem März 1933 in Montagnola ein. <Recht nahe kam ich ihm persönlich>, schrieb Thomas Mann später,…… (14)

トーマス・マンともヘッセは第一次大戦前にミュンヘンのあるホテルで共通の出版者ザームエル・フィシャーに招待されて知り合い、マンの長編『大公殿下』について彼は1910年の雑誌『三月』に批評を書き、その後、随想『ニュルンベルクの旅』でも語っているように、マンを一度ミュンヘンに訪ね、またサン・モリッツの近郊のシャントレラで冬のスキー休暇のときに再び出会った。そのマンがああ1933年3月にモンタニョーラに姿を現わした。「私は彼と個人的にも本当に近付きになった」とトーマス・マンは後に書いた。……

結局、1925年の『ニュルンベルク紀行』に書かれている以外に、ヘッセとマンの直接の出会いの記録は、前出のカーチャ・マンの記憶を書いたものしか見出せない。

……Ich war einen Abend bei Thomas Mann, ich wollte ihm zeigen, daß meine alte Liebe zu seiner Art nicht geschwunden sei, und ich hatte auch ein wenig Lust zu sehen, wie es nun wohl mit diesem Manne stehe, der seine Arbeit so treu und gediegen leistet und dennoch die Fragwürdigkeiten und Verzweiflungen unsres Berufs so tief zu kennen scheint…… (15)

今回の「はじめ」にあたって取り上げた、ヘッセの1936年2月5日付のマン宛てた手紙の内容で、第一次世界大戦中に持っていた仲間、ロマン・ロランの位置に1933年以来は、トーマス・マンが仲間の位置についたと告白している友情や信頼の基盤は、私は一つにこの混乱の時代に於ける、政治姿勢及びその考え方にあると思うので、より大きく変化をみせた、トーマス・マンの1920年代の始めにこだわってその接点を調べてみたかったわけである。そしてその中心は、1922年10月15日ベルリンのベートベンホールで、トーマス・マンがゲルハルト・ハウプトマンの前で行った『ドイツ共和国について』という講演であったし、第一次世界大戦中の中断をはさんで、およそ12年をかけて（1912年初夏にダヴォースのサナトリウムに妻のカーチャを見舞った時の体験から構想し、1913年の9月に執筆を始め、1924年9月27日に書き終えるまで）執筆された『魔の山』

について、最後に取り上げて今回はひとまずこの稿を終えたい。

6) む す び

12年という永い間に『魔の山』は、その時代の中で、マン自身の時代状況による構想そのものが変化せざるをえなかった。その変化は、トーマス・マンの後半生をも決定的にしたものであったし、私がマンとヘッセのかかわりに興味をいだいた重要なテーマでもあった。トーマス・マンの転身も次のヘッセのことばにもみられるように、終生の友となった二人の一つの大きな立場でもあったわけである。

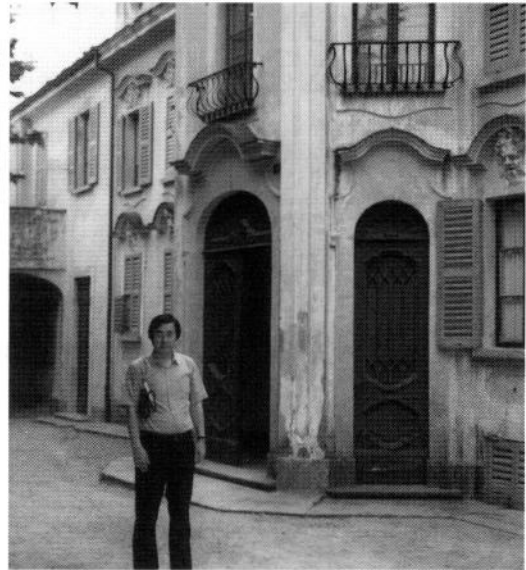
……何故ドイツ人は第一次世界大戦の唯一の悦ぶべき成果であった、ドイツ共和国を、支持し、育てようとはしないで、みんな殆ど申し合わせたように怠慢し、一致してヒンデンブルグに、後にはヒトラーのために投票したりしなければならなかったのか？…… (16)

その『魔の山』について注目すべきすぐれた研究の一つ、京都大学教授山口知三氏の「転身の構図」を参考にさせていただいて、この作品における、トーマス・マンの転身のポイントを簡単にふり返っておこう。1912年夏にダヴォースのサナトリウムでの体験による最初の構想はおそらく短編小説として、平凡な青年技師がスイスのサナトリウムで年上の女性に魅せられて自分を見失い、下界に戻れなくなってしまふ様子をえがく物語にすぎなかったと思われるが、1914年8月の第一次世界大戦によって執筆を中断させられ、マンは前述のように、『戦時随想』等の愛国主義的エッセーを書き、論争の発展に従って『非政治的人間の考察』へと没頭する。日記によれば、19年4月に、本格的な再開がなされ、しかし、それは、以前に書いたものをほとんど書き直すという再開のようであった。山口氏の表現を借りるとそれは最初の「誘惑物語の層」に新たに、第一次大戦体験による「教育的・政治的小説の層」が加わることになる。そして、後半の物語を書く姿勢は、めまぐるしく変わる当時のドイツの政治状況をにらんで流動化せざるを得ないことになる。そしてその状況は、マンの日記1919年4月から21年5月までの間にも、バイエルン・レーテ運動をはじめとす左翼急進運動の武力の鎮圧、右翼勢力によるカップ一揆、バイエルン州反動政府の成立等、激動をくり返している。1921年7月にヒトラーがナチス党の指導者となり、マンの住んでいたミュンヘンを中心に彼らの蛮行が激しさを増していった。この頃からマンの「転向」の助走が始まったと思われる。そして前述の1922年10月15日の講演『ドイツ共和国について』による共和国支持、すなわちデモクラシー支持へと傾いていった。『魔の山』は6章7章の後半章に於いて、進歩主義者セテムブリーニと反動家ナフタを登場させることによって、第一次大戦にカストルブを送り出す結末へと書きすすめられるのだが、これは「転向」後のマンのメッセージになって、1914年のではなく、作者の執筆を終えた、1924年の第一次大戦へと送り出された作品になっていると云えるだろう。ここに現われた、マンの「転身」はおのずから1930年代の彼の姿

を予見させるものになったと云えるのだろう。



聖アボンティオ教会（ヘッセの墓がある）



カーサ・カムッチィ（モンタニョーラ）



ヘッセとニノンの墓



モンタニョーラからルガーノ湖をみる

(年 譜)

	トーマス・マン		ヘルマン・ヘッセ	ドイツ史
1914年 (39才)	ミュンヘン（ボンingg通り1番地）の住居に移る。「魔の山」の稿を中止，論説「戦時随想」（デイ，ノイエ，ルンド シャウ 1914年1月号）評論「フリードリヒと大同盟」を書く。	1914年 (37才)	「ロスハルデ」（湖畔のアトリエ）刊行。第一次世界大戦が始まると，ヘッセはベルンでドイツの捕虜を慰問するため，新聞，図書の編集，刊行，発送に献身的に努力。しかし極端な愛国主義的言辞に反対する感想を書いたため，ドイツでは売国奴のように非難され，多くの新聞雑誌からボイコットされた。	8月，第一次大戦の勃発

1915年 (40才)	「フリードリッヒと大同盟」出版。つづいて、「非政治的な人間の考察」中の諸論文を書きはじめる。	1915年 (38才)	「クヌルプ」、詩集「孤独者の音楽」、小品集「路傍」刊行。8月、ロマン・ロラン来訪。	
1916年 (41才)		1916年 (39才)	父の死, 末子マルティンの重病, 妻の精神病の悪化と入院, 自分の病気などで危機に陥る。翌年にかけて, 精神病医ラングの治療を受け, フロイトの精神分析を研究。それにより「デミアン」を書く。「青春は美わし」刊行。	
1917年 (42才)	パート・テルツの別荘売却。 (1913年~1922年までのミュンヘン国立オペラ劇場総監督ブルーノ、ヴァルターとの緊密な友情。)	1917年 (40才)		
1918年 (43才)	「非政治的な人間の考察」出版。短編「主人と犬」、叙事詩「おさな児の歌」を書く。	1918年 (41才)		11月第一次大戦終了。
1919年 (44才)	「主人と犬」「おさな児の歌」出版。ボン大学から、創立百年記念日にあたって、名誉博士号が授与される。 4月下旬(20日)再び「魔の山」の執筆にかかる。	1919年 (42才)	「デミアン」をシンクレールという匿名でフィッシャーから出した。翌年九版からはヘッセ作とした。「ツァラッストラの再来、一言ドイツ青年へ」も「一ドイツ人によって」という匿名で発表。「メルヒェン」、「小さい庭」随筆、刊行。春、ヘッセはベルンの家を去り、南スイスのルガーノの丘の上、モンタニューラへ移る。「クラインとワグナ」、「クリングゾルの最後の夏」を書く。	ミュンヘンにおける革命。クルト・アイスナー首相殺害。 6月28日ヴェルサイユ条約
1920年 (45才)		1920年 (43才)	「混乱を見る」三つの評論「放浪」随想と詩と水彩画、「画家の詩」詩と水彩画を刊行。「クリングゾルの最後の夏」刊行。	3月右翼クーデタ事件——カップー揆。失敗 6月、中央党、人民党中心の右傾内閣成立。 4月ナチス統結成
1921年 (46才)	前年の秋以後、国内外での講演旅行が主な仕事と云るほど多くなる。1月30日から4日間、スイス、ダヴォースの保養ホテルの滞在は、「魔の山」の舞台の再確認であった。	1921年 (44才)	「詩抄」刊行。	
1922年 (47才)	評論集「釈明と答弁」評論「ゲーテとトルストイ」、小説「詐欺師フェーリクス・クルルの告白」(幼年時代の部分だけ)を刊行。「ドイツ共和制について」という講演をおこない、ファシズムに対しデモクラシー擁護の立場を明らかにする。(10月15日、ベ	1922年 (45才)	「シッダールタ」刊行。ロマン・ロランと再会。	4月16日ラバロ条約(対ソ条約:相互賠償の放棄・外交・通商関係回復) 6月外相ラーテナウ右翼青年に暗殺される。

1923年 (48才)	ルリン市のペトーヴェン・ホールに於いて) 1月兄のハイリッヒ・マンと和解。 「ドイツ共和制について」を出版。スペインに旅行する。母死ぬ。	1923年 (46才)	「シンクレールの備忘録」随想等刊行。離婚。この年からヘッセは座骨神経痛とリウマチ治療のため、チューリッヒ近くのバーデン温泉で晩秋を過ごす習慣になった。(ヴェレナホーク・ホテル)	1月11日フランスとベルギーがルール地方を占領。 11月8日ヒトラーによるミュンヘン一揆(ピアホール『ビュルガーブローイケラー』ミュンヘン市)インフレ破局的昂進
1924年 (49才)	長編小説「魔の山」出版。	1924年 (47才)	ルート・ヴェンガーと結婚。	8月ロンドン会議。 ドーズ案を承認。
1925年 (50才)	評論集「努力」出版、短編「混乱と幼き悩み」を発表、フィッシャー書店から「トーマス・マン全集」10巻が刊行される。	1925年 (48才)	「湯治客」バーデン温泉での自己省察の手記・刊行・秋、南ドイツ講演旅行。ミュンヘンにトーマス・マンを訪れる。	2月28日大統領エーベルト死去。4月26日ヒンデンブルク大統領選出。12月1日ロカルノ条約締結

注

- 1) ヘッセ=マン往復書簡集 井手貢夫・青柳譲二訳 筑摩書房 S. 73-74.
- 2) 夫トーマス・マンの思い出 カーチャ・マン著 山口知三訳 筑摩書房 S. 47.
- 3) 「マン家の人々」転回点1 クラウス・マン著 小栗浩訳 晶文社 S. 89-92.
- 4) トーマス・マン全集XII 書簡 浜川祥枝訳 新潮社 S. 117
- 5) 同上 S. 124- S. 125
- 6) トーマス・マン全集X 森川俊夫訳 新潮社 S. 502
- 7) ドイツとドイツ人 トーマス・マン著 青木順三訳 岩波文庫 S. 52
- 8) トーマス・マン全集XII 書簡 浜川祥枝訳 新潮社 S. 199
- 9) Hermann Hesse Politik des Gewissens Herausgegeben von Volker Michels Suhrkamp S.94
- 10) Thomas Mann Tagebücher 1918-1921 Von Peter de Mendelssohn S. Fischer S. 270, S. 308
- 11) 夫トーマス・マンの思い出 カーチャ・マン著 山口知三訳 筑摩書房 S. 54
- 12) ロマン・ロラン全集39巻 書簡 VII 山崎庸一郎他訳 みすず書房 S. 242
- 13) Ninon und Hermann Hesse Leben als Dialog Gisela Kleine Jan Thorbecke S. 446-S. 447
- 14) Hermann Hesse in selbstzeugnissen und bilddokumenten Bernhard Zeller Rowohlt S. 113-S. 114 井原恵治氏の訳を使用させていただいた
- 15) Die Nürnberger Reise Hermann Hesse Suhrkamp S. 78
- 16) 戦争と平和 ヘッセ著 芳賀 壇訳 人文書院 S. 147